

ケベクとヤサウル

——チャガタイ・ハン國支配體制の確立——

加藤和秀

はじめに

一 諸王ヤサウル

二 諸王ケベクの登場

三 ケベクとヤサウルの反目

四 ホラサンのヤサウル

五 公正なるハン、ケベク

おわりに

はじめに

一三〇六年頃、中央アジアはチャガタイ・ハン、ドウワ Dughlats (在位一二八二・三一三〇六・七年) によって統一され、いわゆるチャガタイ・ハン國の成立を見た。⁽¹⁾ この國家にあつては、モンゴル支配層間の長い權力鬭争によって混亂・疲弊した統治體制の建て直しが急務であつたが、その課題はドウワ・ハン以後、彼の息子たちの手に託されることになる。そして、バルトリドによれば、ケベク・ハン Kebek Khan (在位一二八二—二六) の治下に國家の中央集權化が果たされ、チャガタイ・ハン國は初めて確固たる基盤を得たとされる。⁽²⁾

本稿は、以上のごとき十四世紀の第一四半期におけるチャガタイ・ハン國の支配體制確立の過程を、ケベクとチャガタイ家諸王ヤサウルとの對立を主題として、具體的に跡づけようとするものである。

ケベクとヤサウルの對立のエピソードは、すでにドーソンが詳細に記すが、素よりイル・ハン國史の敘述中のこととして、そのチャガタイ・ハン國史上に占める意味など全く考慮外に置かれた。一方、チャガタイ・ハン國史に直接関わったヴァンペリー及びオリヴァーは、この對立をケベクの兄エセン・ブカ *Esen-buka* とヤサウルとのこととして數行で片付け、グルッセはチャガタイ・ハン國史及びイル・ハン國史の雙方において、その對立の經過を簡單に記すのみである。⁽⁵⁾ また、バルトリド以下のソ聯邦のモンゴル史研究者はこのエピソードにはほとんど關心を示していないが、ストロエヴァに至って初めて專論がものされた。⁽⁶⁾

ストロエヴァは、バルトリドに始まり、ヤクボフスキー⁽⁸⁾、ペトルシエフスキー⁽⁹⁾等によつて組立てられてきたモンゴル期中央アジア史の展開を律する基本的ファクターに關する作業假説に依據して論を進める。

即ち、モンゴル帝國成立後、中央アジアのモンゴル支配層内部に矛盾する二つの政治的傾向が現われた。第一の傾向は、強力なハン權力による中央集權國家の確立を志向し、封建的な軍事遊牧貴族層の遠心的な志向を抑制せんとするものである。これは、在地定住社會への接近、イスラームと土着文化の保護等を特徴とし、主としてハンとそれと結んだ在地の支配層がこの傾向の支持者であつた。第二の傾向は、モンゴルの舊習と遊牧的傳統に従つて、定住民を専ら掠奪と無統制な擄取の對象とみなして、反モンゴルの據點となる都市の根絶や灌漑地の牧地化を志向し、イスラームと土着文化にチングス・ハンのヤサと遊牧ウイグル文化を對立させる。この傾向は大部分のモンゴル・トルコ系の軍事遊牧貴族によつて支持された。

十四世紀前半のチャガタイ・ハン國史もこの二つの傾向の對立抗爭を軸として展開し、それはケベクとヤサウルの對立に最も良く反映している。つまり、ケベクは、マーヴァランナフルの奥深くカシユカ・ダリア溪谷に自ら宮殿を建て、貨

幣制度の改革を行なうなど、定住地帯の統治に意を注ぎ、ハン権力の強化と遊牧貴族の制御に努めた。一方、ケベクと對立してホラサンに亡命したヤサウルは、政治的境界やハンの中央集權化政策などは全く意に介せず、自己の利害に従って行動し、定住民の掠奪に自己の目的達成の唯一の道を見出した。まさにケベクは第一の傾向の強力な推進者であり、これに對してヤサウルはチャガタイ遊牧貴族の總ての特質と志向が現われた人物であつた。

こうしてストロエヴァは先の假説の實證的補強を試みた譯であるが、その所論はヤサウルを第二の傾向の完璧な追隨者に仕立てあげるべく爲された感が強く、例えば、ヤサウルがムスリムであつた點には觸れていないなど問題が残っている。さらに、ストロエヴァがひき繼いでまとめた假説そのものについても、専ら軍事遊牧貴族層に封建化の方向と遊牧的傳統維持の志向の雙方を歸屬せしめ、あたかもかの二つの傾向を遊牧か定住かという二者擇一の形で區別するがごときは、事態をやや單純化して捉えている嫌いがある。

本稿では、このような問題點をも念頭に置きつつ論を進めていきたい。なお、依據した史料とその略稱は次の通りである。

- JT : Rashid al-Din Faql-allah, *Jāmi' al-Tawārīkh*, ed. by B. Karīmī, 2 vols., Tehrān, 1959.
 TU : 'Abd-allāh b. Muḥammad al-Qāshānī, *Tārīkh-i 'Ulāyat*, ed. by M. Hamblī, Tehrān, 1970.
 TW : 'Abd-allāh b. Faql-allāh, *Tārīkh-i Wāṣṣāf*, Tehrān, 1959.
 TH : Sayf b. Muḥammad b. Ya'qūb al-Harawī, *Tārīkh-nāma-yi Harāt*, ed. by M. Z. al-Ṣiddīqī, Calcutta, 1944.
 ZN/S : Niẓām al-Din Shāmī, *Zafar-nāma*, ed. by F. Tauer, Praha, 1937.
 ZN/Y : Sharaf al-Din 'Alī Yazdī, *Zafar-nāma*,

ed. by A. Urunbayev, Tashkent, 1972.

ed. by M. 'Abbāsī, 2 vols., Tehrān, 1957.

MT: Mu'īn al-Dīn Naṭanzī, *Muntahab al-Tawārīkh*, ed. by J. Aubin, Tehrān, 1957.

DJT: Ḥāfiẓ-i Abrū, *Dhayl-i Jamī al-Tawārīkh*, ed. by K. Bayānī, Tehrān, 1971.

MS: 'Abd al-Razzāq Samāqandī, *Maṭla'ī-Sa'dayn va Majma'ī-Bahrāyn*, vol. 1, ed. by A. Navā'i, Tehrān, 1974.

RS: Mirkhvānd, *Rawdat al-Safā*, vol. 5, Tehrān, 1960.

HS: Khwāndamīr, *Ḥabīb al-Siyar*, ed. by J. Humā'i, vol. 3, Tehrān, 1954.

IB: *Voyages d'Ibn Batoutah*, par C. Defrémery et B. R. Sanguinetti, t. III, Paris, 1949.

一 諸王ヤサウル

ヤサウル Yasawr は、チャガタイの第二子ムフトウカン Mö'etüken の第二子ブリ Büri の系統に属す (TW, 509; JT, 534—6)。曾祖父カダクチ・セチェン Qadaqchi Sechen はブリの第三子⁽¹⁾、一二五五年のモンケの南宋遠征に右翼の將として参加しており (JT, 536, 601)。祖父のトカ・テムル Toqa-temür はチャガタイ・ハン (在位一二七二年) を務めた人物であった⁽¹¹⁾ (JT, 548)。父のオルグ・テムル Örgütemür については知るところがないが、ヤサウルはれっきとしたチャガタイ王族の出であった。その生年は、カーシャーニーに従えば、六八八年 (西暦一二八九年) 頃である (TU, 220)。ヤサウルが初めて登場するのは、七〇五年 (一二三〇・六一年) 頃、チャガタイ・ハン、ドゥワとカイドウの子チャパル Chapar との對立が深まりつつあったマールヴァランナフルにおいてである。この時、ヤサウルは、オゴタイ家諸王キュルスベ Küresbe をめぐって、チャパル派のジュチ・カサル家諸王バーバー Bāba Ughai と對立し、母方の叔父にあたるジンクシ Jinkshi の協力を得て、カイドウの子シャー Shah Ughai の助力を得たバーバーと一度ならず戦鬪を交えた。これを機に、シャーシェ Shash の地においてチャパル派とドゥワ派の間に調停會議が開かれることになったが、兵を歸し

て待機していたシャーとバーバーに對して、ヤサウル等の率いるドゥワ側の大軍が突如として襲いかかり、バーバーをホラズムに逐い、シャーのタラス Talas のオルドを掠奪するに至った (TU, 35—7; TW, 515—17)。さらにこれよりやや遅れて、ドゥワによるチャガタイ家諸王ズルカルナイン Dhu'l-Qamāyn のアム河上流域への任命に關わつて、ヤサウルはズルカルナイン及びジンクシと協力して、反抗するキュレスベと戦いこれを捕えた (TW, 513)。右の二つの事件は、マーヴァランナフルにおけるチャガタイ家の優位を確立したという點において、ドゥワの統一事業の重要な一環を成していたのであり、その中で若冠十七、八歳のヤサウルはその軍事的才能を發揮して、いわばドゥワ派の急先鋒として活動していた。

所で、ヤサウルのオルドやユルトはどこにあったか。ワッサーフによれば、サマルカンドに居住地 (maqām) を有していたといい (TW, 519)。また後のホラサン亡命に際してもサマルカンドより發した (TU, 213; TW, 613) というから、サマルカンド近邊にあったことは間違いない。そして、カーシャーニーによれば、ヤサウルはブハラの Badrmandāni (イブン・バトゥータの記す Badr al-Dīn al-Maydāni か?) の手によつてムスリムになったという (TU, 213; cf. IB, 556)。この入信がいつのことであつたかは不明であるが、ホラサン亡命に多數のサマルカンド及びブハラのイマームたちを伴なつたこと (TU, 219) などから、彼がかなり早くからイスラームと接觸していたことが推測される。つまり、ヤサウルは、中央アジアに經濟的・文化的に大きな比重を占めるマーヴァランナフルの中央部に位置して、ドゥワ派の有力な將としての地位を固めつつ、イスラーム文化の影響下に定住社會との關係を深めていたのであらう。

さて、七〇五年から翌六年にかけてカイドゥ家諸王を追ひ落し、中央アジアに單獨主權を確立したドゥワは、七〇六年 (二三〇六・七年) 中に病没し、彼の息子クンチュク Könchek が跡を襲つた (TU, 53; TW, 518)。このクンチュクの治下、ヤサウルはジンクシと共に、不穩な行動を示していたキュレスベを倒し、ドゥワ家政權の安定に貢獻している (TW, 518)。

しかし、クンチェクが七〇七年末（一二三〇八年五・六月頃）に没するや、代わってヤサウルの大伯父にあたるタリク Taluq が權力を掌握するに至った。この間の事情は定かではないが、ドゥワの息子たちの内、年長のクトルグ・ホジャ Qutluq Khwaja は先にカイドゥによってアフガニスタンに派遣され、六九八年（一二九八・九年）頃、インド遠征の歸途負傷がもとで没していたし（TU, 192—3）¹ エセン・ブカは七〇五年（一二三〇五・六年）²、ドゥワによってクトルグ・ホジャの後継者に任命され、この時はるかアフガニスタンの地に居た（TW, 509—10）という事情から察すれば、クンチェク亡き後、ドゥワ家には當面ハン位を繼ぐべき人物が見つからず、チャガタイ家の長老格であったタリクが立ったものと考えられる。

タリクはケルマーンのスルターン・ルクン・ウッディーン Sulṭān Rukn al-Dīn の娘トルカーン Turkān を母に持つムスリムであり、イスラームの普及に努める一方、ドゥワ一族やドゥワ派のアミールたちに壓力を加え始めたという。これに對して、彼のいとこにあたるオルグ Ögüz が「ドゥワの息子たちの權威を認めず、他の者が彼らに代わってウルスの王たるかがどうしてあつて良いか？」³と言つて起ち上がり、次いで、ヤサウルがジンクシと結んで彼に對して軍を率いた（TU, 147; TW, 518—9）。これらのことは、タリクの即位が必ずしもチャガタイ・ハン國內の總意によるものでなかったことを示すと同時に、とりわけタリクに近い血筋の諸王の反對は、この時すでにチャガタイ・ハン位へのドゥワ家の權威が相當程度確立していたことを證する。しかし、結局、オルグはタリクと戰つて殺され、さらに抵抗した他の諸王たちも討たれた。他方、ヤサウルはフェルガーナにてタリクの派遣したアリー・マリク ‘Alī Malik の軍と一度は對峙したが衆寡敵せず、軍備を整え直すべく退却せざるをえなかった（TW, 518—9）。かくして、タリクの勢威は益々高まり、ヤサウル等ドゥワ派の諸將は窮地に立たされ、ドゥワ家の權威もまさに地に墮ちたかに見えた。だが事態はケベクの登場によつて急轉回を見ることになる。

二 諸王ケベクの登場

ケベクは、ムアトゥカンの第三子、つまりブリの弟エスン・トア Yesun-To'a の系統に屬し、一時チャガタイ・ハンの權力を中央アジアに確立したが、後にカイドゥによって失脚させられたバラク Baraq (在位一二六六—七一年) を祖父に、そしてドゥワを父として生まれた (JT, 536—9, 546—8; TU, 147; TW, 519)。その生年は明らかではないが、七〇八年 (二三〇八・九年) 頃に、なお「ドゥワの少子、(pisar-i kihn-i Duvā) あるいは「ドゥワの年少の息子、(pisar-i kūchak-tar-i Duvā) と記されている」と (TU, 147; TW, 519) や「兄クンチュクの没時、彼がアルマリク地方の父や兄のオルドの近く⁽¹⁶⁾に居たにもかかわらず、前節で述べたごとくハン位を繼ぐに適した人物とみなされなかつたらしいことから推測して、當時まだ成年に達しておらず、恐らくヤサウルより五、六歳年下であつたと思われる。それ故、タリク派が「我々の王國とウルスの〔權威を確立するための〕最良の方策はドゥワ一族を完全に打倒して、彼らの子孫を根絶やしにすることである」と決議したことを、タリクに従っていたあるアミールから知らされた時、ケベクが「驚き慌て、彼〔タリク〕を恐れるあまり、泣きわめきつつウーザン・バハードウル Ūzan-bahadur の天幕に逃げ込んで、不運な時の危害を〔逃れるべく〕援助と保護を求め、ウーザンに取りすがつてタリクの意圖と事情を説明した」というのもある程度うなづける (TU, 147)。この結果、ウーザン・バハードウルは彼に援助を誓い、宴會中にタリクを襲う計畫を立てるに至つた。そして、ウーザンが機を計つて宴席を離れるや、待機していたケベク及び彼の弟エブゲン Abūkan の二百騎とウーザンの百騎とはタリクのオールドに火を放ち、酒に酔っていたタリクやタリク派の諸將をことごとく殺すことに成功したのである (TU, 147—8; TW, 519)。ワッサーフによれば、このクーデターは七〇八年のことであつたという。

しかし、この直後、政權をドゥワ家の手に奪回したケベクの前に早速危機が訪れた。すなわち、この機に乗じて、ドゥワに屈服を餘儀なくされていたカイドゥの息子チャパルが、ヤンギチャル Yangichar トクメ Tukma オルラー Ūrlā

オルス *Urūs* 等のオゴタイ家諸王を率いて、ケベクに對して軍を進めてきたのである。ケベクは自ら軍を率いてアルマリックのクナース草原 *Qunās* を發しチャパル軍を迎え撃ったが、敗北を喫し、彼の軍は總崩れをきたした。だが、ウズカンド *Uzkand* に居たタリクの甥のアリー *‘Alī Ughai* やムバーラック・シャー *Mubarak-shāh* の息子のシャイフ・ティームール *Shaykh Timūr* 並びにカイドゥ家のシャー等が助力を申し出、ケベクはクナース草原にて再びチャパル軍と交戦してようやく勝利を収めることができた。一方、チャパルはイリ河を越えて元朝に亡命するに至り、トクメはケベク軍の追撃を受けて殺された (TU, 148—9; TW, 519)。

かくして、ケベクはドゥワ家政権崩壊の危機を脱し、チャガタイ・ハン國の支配權を手中に収めることに成功した。と同時に、はしくもオゴタイ家分子の大部分が驅逐され、チャガタイ・ハン國內の最大の不安定要素が除かれたのである。しかし、この成功においては、ケベク自身の非力さと對照的に、タリクに抵抗したオルグやヤサウル、クーデターを立案したウーザン・バハードウル、そしてケベクをチャパルに對して勝利せしめたアリーのごとき諸王やアミールたちの力量の大きさが印象づけられる。このことは、ドゥワ家を支持する勢力の廣汎な存在を證する一方で、ドゥワ家政権自體がいまなお抱える脆弱性をも示すものに他ならなかった。再度タリクのごときハン位要求者さえ出現しないとは言いい切れない狀況がそこには存していた。その意味で、これ以後ケベクがとった諸策は注目に値する。

すなわち、ケベクは先ず元朝カーン、武宗カイシャン *Qaishan* にプラード *Pulād* *Gurkān* を使節として派遣し、次のごとく上申した。

「タリクは我々の父の地位を横領していた。私は偉大なる神とカーンの統治の力によって彼から〔その地位を〕奪い返した。また、トクメをも敵對し叛いたので除去した。これ以後カーンに仕えたい」と。

カーンはこれを嘉し、彼に恩賜したという (TU, 149)。これは、ケベクがカーンの權威をもってタリクを「篡奪者」とみなし、ドゥワ家政權の正當性を主張せんとしたものと理解し得る。

次いで、ケベクは諸王アリーに對してその功績を讃えて、「ホータン地方の支配權 (yālat va imārat-i diyār-i Khutan)」を與え、「全トルキスタン地方 (tamāmāt-i ħudūd-i Turkistan)」をその管理下に置いた。」しかし、アリーが任地へ向かつて出發するや、直ちに一部隊を派遣して追跡させ、彼を殺害するに至った。カーシャーニーによれば、「彼 (アリー) が勇敢な戰士であつたので、その反亂を恐れた」ためであつたという (TU, 149)。つまり、ケベクのこの果斷なる處置は、ドゥワ家政權を脅かすに足る最大の存在を除去したものであつた。

そして、七〇九年の初め (一三〇九年六月頃)、ケベクはクリルタイを招集し、兄エセン・ブカの即位を決議せしめた。カーシャーニーによれば、彼はアフガニスタンのエセン・ブカに次のごとく傳えたという。

「余は王國の玉座と王冠を汚濁した不純な者どもから清め、總ての敵を打倒して玉座を汝のために解放した。直ちに晝夜を問わず王國の首都へ向かい、長い期間その玉座と王冠が従士も主人も持たないままであつた軍と民を統べよ。」 (TU, 149)。

恐らく、ケベクは自分の年齢等を考慮して敢えて立たず、年長で且つ經驗も積んだ兄をかつぎ出したのであつたろう。こうして、急速アフガニスタンより歸還したエセン・ブカがチャガタイ・ハン國の王位に就いたのである (TU, 149—150; TW, 519—20)。

所で、ドーンソン以下は、¹⁴⁸クーデターが成功した時點でケベクがいったん即位し、その後エセン・ブカに位を譲ったとしているが、以上の経緯から見て、この時にケベクの即位はありえなかつた。むしろ、元朝カーンへの遣使、アリーの謀殺、そして兄エセン・ブカの推舉というケベクの諸策は、彼がドゥワ家政權の懦弱性を良く認識し且つ危惧していて、それを克服すべく極めて慎重且つ冷靜に一連の事を運んだことを示しており、そこにすでにケベクの統治者としての資質の一端がうかがえるのである。

さて、カーシャーニーによると、エセン・ブカは即位後、「弟ケベクをフェルガーナの地域とマーヴァランナフル地方

の、そして、キシュとナフシャブ *Nakshab* の地の統治に派遣した」という (TU, 150)。後に、恐らくハン位に即位後のことと思われるが、彼がナフシャブの近くに自ら宮殿を造營した⁽¹⁹⁾ (ZN/Y, 1136, 1-85) というから、これ以降、ケベクのオルドやユルトはカシユカ・ダリア *Kashka Darya* 溪谷に置かれ、そこが彼の根據地になったと考えられる。

さらに、ナタンズイーによれば、エセン・ブカはケベクに「ウルス全體から自らのために、富める者たち、(mutanawvil-
vil) を選ぶよう命じ、ケベクはそうにした」、そして、彼らの子孫たちはティームール朝期に至っても、ケベクのインジュイーたること、(Injugar-i-yi Kebeke) を自ら誇っていたという (MT, 107)。この「富める者たち」とは恐らく、有力なモンゴルの諸將あるいは部族集團を指し、ケベクはそれらを「インジュイー」つまり直屬の家臣として自ら選ぶことを許されたのであろう⁽²⁰⁾。

かくして、ケベクは大きな権限と強力な家臣團を擁して、チャガタイ・ハン國の經濟的・文化的中心であったマーヴァランナフルとフェルガーナに確固たる地位を得たのであり、このことが後の彼の統治のあり方を大きく決したのであることは疑いない。そしてまた、ケベクのマーヴァランナフル任命は、すでにその地に地歩を占めていたヤサウルの權益を損ねその地位を脅かすに充分であり、後の兩者の對立の發端となったと考えられるのである。

三 ケベクとヤサウルの反目

エセン・ブカの治下には、七〇四年(一二〇四・五年)の講和以來、⁽²¹⁾ 久しく途絶えていた元朝及びイル・ハン國との争いが起こった。

即ち、當時アフガニスタンでは、エセン・ブカの後任にクトルグ・ホジャの子ダウド・ホジャ Dawd Khwāja が任ぜられニクーダリーヤーンを率いていたが、その輩下にあったドゥワの女婿アバチ Abaji の子のテムル Timur Gurkan とラクミール Lakmir は、その羈絆を脱するべくイル・ハン、ウルジャイトウの援助を求めた。これに應じて、七十二年

の初め（一二二二年五・六月頃）、イル・ハン國のホラサン駐屯軍はテムル等とともにダウド・ホジャを攻撃し、彼をアム河の彼方へ追いやった。かくして、ダウド・ホジャはエセン・ブカのもとへ逃れ、彼に援助を求めるに至った（TU, 152, 201—2）。

ほぼ同じ頃、ウルジャイトウの元朝への使者アビシカ Abisqa の、元朝カーンとイル・ハンによるチャガタイ・ハン夾撃計畫を匂わす不用意な發言が問題化し⁽²²⁾（TU, 203—4）。さらに、その後、エセン・ブカとアルタイ方面元朝軍の將トガチ Tughai Jinsank との間に行なわれた、國境地帯における雙方のユルト畫定を圖る會談が決裂した（TU, 202—3）。以上のごとき狀況が重なって、エセン・ブカの元朝カーン及びイル・ハンに對する不信が一氣に高まり、遂に、彼は國內を通過する兩國の使節を拘留する舉に出た⁽²³⁾（TU, 204—5）。次いで彼はトガチに對して軍を派遣すること三度、しかしいづれも勝利を得ることができなかった。この内一度は、ケベクが弟のエブゲンやシャー、ジンクシ等と一萬の軍を率いてくる（TU, 205—8）。

この結果、カーンの「敵を彼らのユルトから驅逐し、彼らの夏營地・冬營地を奪って自己の所有にせよ」との敕令が發せられ、今度は逆にトガチ以下の元朝軍がチャガタイ・ハン國領内に攻め込むに至った⁽²⁴⁾。そしてカーシャーニーによれば、エセン・ブカは、元朝軍によって多大の領土とユルトが失なわれるのを懸念し、西方のホラサン地方の占領をもってその失地を補ない、同時にダウド・ホジャのために報復を果たそうと決心したという（TU, 208）。

かくして、ケベクを筆頭にヤサウル、ジンクシ、ダウド・ホジャ、シャー等の諸王やアミールたちの率いる遠征軍が、七一年の秋（一二三二年秋）にアム河を越えた⁽²⁵⁾（TU, 153, 209; TW, 610）。このホラサン遠征軍の兵力は、カーシャーニーによれば四萬あるいは五トウメン（TU, 164, 209）。サイフィーには六萬騎とあり（TH, 630）。またケベク以下の諸將の顔ぶれを見てもマーヴァランナフル方面に駐屯する有力な諸將のほとんどが參加した大規模なものであったことは疑いなく、これにかけるエセン・ブカの期待の程が知られよう。チャガタイ軍は集結の遅れたイル・ハン軍の先鋒を一蹴し

てムルガープ草原に達した。これに對して、ホラサンのアミールの長アミール・ヤサウル Amir Yasawul は急遽ホラサン軍を招集してこれを迎え撃ったが敗れ、主將の一人ブジャイ Bojay は戦死し、アミール・ヤサウルもかろうじて逃れ出したという (TU, 153, 209—10; TW, 610; TH, 607—9, 629—35; DJT, 106—110)。

チャガタイ軍がこのように戦果をあげつつあったその最中に、ケベクとヤサウルの意見の對立が表面化し始める。先ず、チャガタイ軍がムルガープにて捕えた千戸のアミール、アラール・ティームール Aratimur とその従士たちについて、ケベクが殺すよう主張したのに對して、ヤサウルはそれを妨げ、アラール・ティームールを養子としてひき取ったという (TU, 209)。また、ケベクとジンクシが敗走する敵を追ってトゥース Tus まで攻撃せんとした時、ヤサウルは「ラマダン月にどうして信徒たちを殺害・討滅しえようか」と言つて彼らをひき止めている (TU, 210)。さらに「サイフィーによると、ケベク等が敗走するホラサン軍を追撃してことごとく殺したのに對して、ヤサウルはホラサン軍將士からは馬や武器などを取り上げるだけで放免していた。そして他の諸王たちが夜も追撃せんとしたのを、「我々は戻るべきだ。何故ならば、ホラサンのアミールの多くが殺され、彼らの軍の兵士たちの多くが傷ついている。偉大なる博士や高德なる學者たちは、敗走者の追跡は賞讃さるべきものではないとしている」と言つてひき止めたという (TH, 635; DJT, 110)。ここでは、任務の徹底遂行を目指すケベクの冷酷さにひきかえ、ヤサウルの寛容さがひとときわ目立つ。無論、これらのヤサウルの行爲は、信仰心に基づく純粋な寛容精神の發露とはみなし難く、むしろ、イル・ハン國側に自分の寛大さを印象づけ、彼らと誼みを通じようとしたものと解される。事實、後のイラン亡命の際、彼が助けたアミール・アラール・ティームールが彼とイル・ハン宮廷との仲をとり持ったし (TU, 213)。また、ヤサウルの亡命直後に筆を描いたカーシャーニーは、彼の行爲や人柄について極めて好意的に記す。ホラサン遠征中に、ケベクがジンクシに「ヤサウルはこの純緑の牧地、地上の樂園のごとき草原に留まる意圖を有している」と語つた (TU, 210) のは、まさにその故であつた。

所でサイフィーによれば、ヤサウルのイラン亡命の意圖については、ケベクはホラサン遠征の數年前より氣附いてお

り、エセン・ブカに次のように申し立てていた。

「諸王ヤサウルは心をホラサンの方に傾け、ウルジャイトウ・スルタンとの友好を求めている。彼が騒亂を起こしてマールヴァランナフルの人民をアム河の向こうのホラサンに連れ去るのを許してはならない。もし世界統治者「たるハシ」の救命が發せられるならば、私は彼を殺すかあるいは捕えよう。」

しかし、エセン・ブカはケベクの意見を取りあげずにいたという(TH, 640; DJT, 113)。

すなわち、すでにこの時に、ドゥワ家政權の安定強化を意圖して諸王やアミールの恣意的な行動を抑えようとしたケベクと、その束縛を嫌って他に新天地を求めんとしたヤサウルの對立は明らかとなっていたのであり、ホラサン遠征を機にその對立が表面化したと考えられる。

七一三年ズルカダ月(一二一四年二・三月)、チャガタイ軍は、携行した糧食が盡き、また、元朝軍の侵入のため歸還せよとのエセン・ブカの命令に従って、急遽撤退する(TU, 164, 210—11)。結局、ホラサン遠征は失敗に終つたのであるが、歸還したケベクはエセン・ブカへの報告において、その失敗の原因をヤサウルの行爲に歸せしめた。カーシャーニーによれば、そこでエセン・ブカはヤサウルの地位と軍の指揮權をケベクに與えて、ヤサウルの討伐を命じたという。一方、アイフィーは、エセン・ブカがホラサン軍の反攻を恐れて冬になってからヤサウルを召喚して問い質すことを約束したと傳える(TU, 211; TH, 641; DJT, 113)。いずれにしても、ヤサウルの離反は明白となつたのであり、エセン・ブカとしても何らかの措置を取る必要があつた。しかし、彼がケベクにヤサウル討伐の命を實際に下したのは、ヤサウルが亡命するべく南下し始めた七一六年(一二一六・七年)に入ってからのことであつた(TU, 217—8; TH, 640)。この間の七一五年ジュマード第一月(一二一五年八・九月)には、ジュチ・カサル家諸王バーバーのホラズム地方掠奪に對して、ヤサウルが出動し、バーバーをイラン方面へ驅逐するという事件が起つてゐる(TU, 173—4)。恐らくエセン・ブカは、元朝やイル・ハン國との對立が解消されていない困難な状況下に、ヤサウルの處置をひき延ばさざるを得なかつたのであろう。

七一六年、ケベクは遂にヤサウル討伐に向かった。しかし、シンクシより知らせを受けたヤサウルは豫め備えてケベクの攻撃をしりぞけ、ケベク輩下のアミールや兵士たちの多くを自分の指揮下に従えたという。そして、アラール・ティームールを使節としてウルジャイトウのもとへ派遣し、急遽サマルカンドを發つてテルメズ Tirmidh に向かった。ヤサウル軍は南下の途次、「彼（ヤサウル）の許可なく」、サマルカンド、サーガルジュ Saghai⁽²⁸⁾、キシユ、ナフシャブ、クーフタン Kufan 等の地を掠奪し、住民たちを捕虜として連行した。ただ、ホジエンドとブハラは彼らの通過方向から離れていたので掠奪を免れたという。一方、ウルジャイトウのもとに到着したアラール・ティームールはヤサウルの亡命を願ひ出、バルフ Balkh とシュブルカン Shufurgan にユルトを要求してかなえられた。そして、直ちにアミール・ヤサウル率いるホラサン軍がヤサウル支援のために派遣され、アム河を越えた。他方、ケベクの苦戦を知ったエセン・ブカは急遽援軍を送り、ケベクはシンクシ、シャー等とともに鐵門關 Dar-i-Ahann にて再びヤサウルと對戦したが、ホラサン軍の到着のためにもたもた敗退した。その後のテルメズ近邊での諸戰鬪においても、ケベク側に全く利あらず、サイフィーによれば、七一六年ラジャブ月（二三一六年九・十月）、ヤサウルはアム河を渡つてシュブルカンの草原に降り立ち、同時にホラサン軍も莫大な戦利品や捕虜を携えて歸還したという（TU, 211—8; TH, 640, 643—4; DJT, 113—15）。

以上のごとく、ケベクはマーヴァランナフルに大きな被害を蒙った上に、ヤサウルのイラン亡命を阻止できなかった。しかし、ヤサウルと彼に追隨する諸王やアミールたちの國外退去によって、結果的には、ハン權力の強化にとっての大きな障害が除かれるに至ったのであり、後の彼の統治にとってその意義は計り知れないほど大きかったに違いない。一方、ヤサウルを受け容れたイル・ハン國は、これ以後彼の活動に悩まされることになる。

四 ホラサンのヤサウル

ヤサウルはホラサンに落着くや、直ちにウルジャイトウのもとへ使節を送り恭順の意を表した。これに對してウルジャ

イトウは、「余はアム河からマーザンダラーンの境界に至る地を諸王ヤサウルに與えた。ホラサンのアミール及びマリクたちは可能な限り彼への奉仕と表敬に努め、彼のいかなる服従の條件、命令と禁止にも違反することのないように」との敕令を發した (TH, 644—5)。カーシャーニーによれば、同時に兩者の間に約定書 ('*and-nama*) が取交わされたという (TU, 218; DJT, 118—19)。これらのウルジャイトウの措置が、第一にチャガタイ・ハン國からの攻撃に備える意圖から爲されたものであったことは疑いない。いずれにしても、その結果、ヤサウルは公式にホラサンのアミールやマリクの上位に立つ權限を與えられた。七一六年ラマダン月(一二三六年十一月・十二月)にウルジャイトウ没し、次いで、アブー・サイード Abu Sa'īd が即位した際⁽⁶¹⁾にも、兩者の間に改めて約定書が交わされ、ヤサウルの地位は再確認された (TH, 659—69; DJT, 129—33)。

必然的に、ホラサンのアミールたちの間に、ヤサウルに誼みを通じて自らの地位を固めようとする動きが現われた。先ず、ホラサンのアミールの長、アミール・ヤサウルが、姻戚關係を結ぶ⁽⁶²⁾ことを希望して、莫大な贈り物を携えてヤサウルのオルドに赴いた。一方、これを阻止せんと、アミール・ベクトゥット Amir Biktut はヤサウルにアミール・ヤサウルに對する疑惑の念を吹き込み、サイフィーによれば、先に戦死したアミール・ブジャイの後任をめぐるアミール・ヤサウルとアブー・サイードの保護者アミール・セヴィンジ Amir Siving の對立に乗じて、遂にアミール・ヤサウルを謀殺⁽⁶³⁾して、ヤサウルの信賴を勝ち取るに至った。これに對して、アミール・ヤサウルの復讐を果たすべく、諸王ミンガン Mingan がアミール・ヤサウルの息子たちと結んで、ベクトゥットに對抗したが、アミール・ヤサウルの後任のアミール・エセン・クトゥルグ Amir Isan-qutluğ がベクトゥットを支持したため、ホラサンのアミールの多くが、自發的にあるいは餘儀なくヤサウルに服従したという (TW, 620—22; TH, 649—55, 670—73; DJT, 123—26)。

しかし、必ずしも總てのアミールやマリクが彼への服従を認めたわけではなかった。特に、ヘラートのクルト政權の主、マリク・ギヤース・ウッディーン Malik Ghiyāth al-Dīn Kurt は、當初よりヤサウルへの服従を拒否しており、そ

れに倣って、ニクーダリーヤーンを率いるアバチの子テムルや、シースターンのマリク・ナスィール・ウッディーン Malik Nasir al-Din、その他のホラサン地方のマリクたちが頑強に抵抗した。このためヤサウルは、ヘラートやシースターンを攻めたがいずれも失敗している (TH, 645—48, 656—59, 674—77; DJT, 135—39)。それにもかかわらず、自らの勢力の増大に意を強くしたヤサウルは、アブー・サイードのもとでのアミール間の権力闘争に乗じて、遂にイラン全土の支配権を狙い始める。⁶⁴ 因みに、サイフィーによれば、アミール・エセン・クトウルグはヤサウルに、ホラサンからイラクへの進出を促す書簡を送っている (TH, 673)。七十八年ジュマード第二月 (三十八年七・八月)、ヤサウルは部下のアミールたちに、ホラサンを経てイラクに攻め込む計畫を打ち明け、同年ラジャブ月 (三十八年八・九月)、ヤサウル軍はホラサンに突入し、ヤサウルはマーザンダラーンまで、ベクトウトはダームガーン Damghan に達した。しかし、ホラサンの諸都市はヤサウルの服従要求をはねつけ、メシエド Mashhad などいくつかの都市では派遣されたヤサウル軍の兵士を殺したという。結局、ヤサウルはホラサンの制壓を爲し得ず、マーザンダラーンより撤退を餘儀なくされたのである (TH, 680—81, 688—91)。

一方、マリク・ギヤース・ウッディーンは、ヤサウルの行動についてアブー・サイードに訴え、アミール・チョバン Amir Chubān から援助の約束をひき出した。そして、直ちにアミール・フセイン Amir Husayn がヤサウル討伐に任ぜられた (TH, 692—3; DJT, 133)。すなわち、ここにおいて、イル・ハン國當局はヤサウルの行動を反亂とみなすに至ったのである。かくして、マリク・ギヤース・ウッディーンは、ヤサウルの留守に乗じてバードギース Badghis のブジヤイの息子アブー・ヤズィード Abu Yazid のオルドを襲わせ、アブー・ヤズィードの家族とベクトウトの兵士たちの家族を捕えた。ヤサウルは直ちに捕虜の返還を求め、拒否されるや三度にわたってヘラートを攻圍したが果せず、周辺地域を荒らしただけで撤退した (TH, 693—717)。以後、マリク・ギヤース・ウッディーンは、ヤサウルに従ったマリクたち、例えば、イスフィザール Isfizar のクトゥップ・ウッディーン Qutb al-Din、ファラーフ Farāh のイナルテギン

Yinal-ikin' バールズ Bakharz のサラ Zara 要塞のアブドゥル・アズィーズ 'Abd al-'Aziz' そして、ハーン Khwāf のホジャ・マシド Khwaja Majid 等を次々と制壓し、ヤサウルの支持基盤を徐々につき崩していった (TH, 717—42, 750—65)。

そして、遂に七二〇年ジュマード第一月 (一三二〇年六・七月)、マリク・ギヤース・ウッディーンは、チャガタイ・ハン、ケベクに軍隊の派遣を要請した。これに應じて、ケベクはイルチギдай Ijkiday、ルスタム Rustam、モンカリ・ホジャ Munkal-khwaja、ブラド Bulad という諸王を四萬騎とともに派遣し、さらに、アミール・フセインに使者を送ってホラサン軍とヤサウル夾撃を策した。かくして、アミール・フセインやマリク・ギヤース・ウッディーン等の率いるホラサン軍四萬騎もヤサウルに對して出動した。チャガタイ軍は、ヤサウルの陣營に近づくと、祕かに一團の者をヤサウル軍の中へ送り込み、好條件を提示してヤサウルのアミールたちの離反を促した。その結果、兩軍が戦闘に入った時、ヤサウル軍のアミールたちが一齊に離脱し、ベクトウトを襲つてこれを殺した。ヤサウルはこれを知つて一族とともに逃れ出たが、イルチギдайは一千騎に追撃させ、ヤサウルを捕えてその場で殺すに至った (TH, 765—68; DJT, 158—59; MS, 51—2)。享年三三、三歳、ホラサンに覇を唱え、一時はイランをも窺つた諸王ヤサウルのあつけない最期であつた。これをもってホラサンにおけるヤサウル一黨の活動は終りを告げるが、マーヴァランナフルに戻つた彼らの子孫たちは、十四世紀半ば以降、いわゆる「ヤサウル黨」Yasāwriyān としてサマルカンド地方に再び勢力を築き、チャガタイ・ハン國崩壊後の政局に關わることになる (ZN/S, 15, 35—6; ZN/Y, 95a, 98b, 115b, 116b, 121a, I—32, 41, 90, 92, 106; MT, 197, 235, 240, 266. etc.)。

所で、カーシャーニーは、ヤサウルについて、「美しい顔立ち、善良な性格、少し突き出た顯著な廣いひたい、愛すべき人柄、賞讃すべき考えを有し、片眼が斜眼で、背が高く、頑強な體軀、分厚い體格、肥満した巨體〔の持主〕」であつたと傳へ (TU, 220)。その剛勇さの記述に相當のページを割く。また、彼の傳える、ヤサウルと愛人の女奴隷とのエピソード

ソードは、かの項羽と虞美人の物語を想起させる (TU, 209)。これらの記事からは、偉丈夫で豪放磊落、剛勇無雙にして且つ情の深い、典型的な遊牧貴族としてのヤサウルの風貌が浮かび上がってくる。しかし、彼の行動について、マリク・ギヤース・ウッディーンは次のごとく評する。

「諸王ヤサウルからは、余とこの地のアミールやマリクたちにはいかなる恩恵もたらされないであろう。何故ならば、彼の行動の故に、マールヴァランナフルは荒廢し、何千というムスリムが彼の恐れを知らぬ軍隊によって破滅したからである。……結局、諸王ヤサウルはこの地において騒亂をひき起こし、諸國の軍隊は何年もの間それを鎮めることができないであろう。」 (TH, 646)

これはまさしく、定住社會の統治者たる者の言である。つまり、國家統治や社會の安定という觀點から見た場合、ヤサウルの行動は阻害條件でしかなかった。例えば、彼の最期の局面を見るなら、彼がベクトウト一人に頼って重用し過ぎ、他のアミールたちを上手く掌握していなかったこと、彼の軍はあくまでも戦利品獲得という點において結びついたりわけ寄せ集めの軍隊であり組織化が不充分であったことは明らかである。結局、ヤサウルの活動は、單なる掠奪や武力行使に終始しており、そこには何ら確たる政治的理念あるいは配慮というものが見出されないのである。この意味で、ヤサウルの志向は、ストロエヴァの述べる第二の政治傾向に確かに合致する。

しかし、彼はムスリムであった。彼の信仰について、マリク・ギヤース・ウッディーンは言下に否定する。つまり、「もし諸王ヤサウルが信仰に關して最低限のものを身に附けていたなら、何千というムスリム男女の生命を奪うことに熱中ではしなかったであろう。……彼の外面的な善行は信頼しえない」と (TH, 648)。だが、ホラサンにおいて彼がヘラートのガーゾルガー Gāzurgāh、ヒキワフンサーリー Ansari の墓や、ジシュン Jesht のシャイン・ジシュン Shaykh Jesht の墓、シャーム Jam のシャイン・アブ・フ・Shaykh Ahmad の墓などについて語っている (TH, 654, 680, 688) ことは、イラン亡命に際して、ナジウム・ウッディーン・アキリー Najm al-Din 'Aqil' サイン・ウッディーン・アサン Sayf

al-Din 'Asaba' ナジナム・ウッディーン・サニーニ Najm al-Din Samini' サイフ・ウッディーン・バフシー Sayf al-Din Bakshi' ジャマル・ウッディーン・ナサフィー Jamal al-Din Nasafi' とうづハラヤサマルカンドのイマームたちを傍に從えていたこと (TU, 219)' として、ウルジャイトウが使節として派遣したルームの司法長官 qāḍī al-quḍāt' ナジナム・ウッディーン・タイイビー Najm al-Din Tayyibi' への對應の仕方 (TU, 218)' などから見て、ヤサウルが、スーフイズムの傾向を帯びつつも、明らかにイスラーム及びイスラーム文化に良く馴んでおり、イスラーム諸學についてさえもなにかの理解力を有していたことが判る。このような彼の信仰のあり方は、マリク・ギヤース・ウッディーンの非難にもかかわらず、恐らく、當時のトルコ・モンゴル系遊牧貴族によるイスラーム受容の一つの型を示すものであろう。モンゴルの征服から約一世紀を經過した中央アジア、特にマーヴァランナフルには、ヤサウルのごとく、遊牧民的體質を色濃く保持しながら、同時にイスラーム定住文化への傾倒を深めつつある遊牧貴族が出現していた。つまり、少なくともこの時期には、彼ら遊牧貴族にとって根本的な問題は、すでに遊牧か定住か、あるいはイスラーム文化を受容するか否かということではなくて、イスラーム文化並びに定住社會といかに關わるかという點にあったと考えられる。ストロエヴァの假説の一つの缺陷は、このような觀點を包括しえない所にある。そして、ヤサウルの場合は、イスラーム受容の側面はともかくも、定住社會との關わり合い方から言えば、舊態然たる掠奪あるいは武力的強制という方法にのみ頼り、定住民統治において無策・無定見をさらけ出した。この點に、ヤサウルの政治行動の限界が見出されるのである。

五 公正なるハン、ケベク

ケベクは兄エセン・ブカの跡を繼いでハンとなったが、その治世について諸史書が伝える情報は極めて少ない。在位年代については、唯一ナタンズイー (MT, 109—11) が、七〇九年 (二三〇九・十年) 即位し、十二年間の統治後、七二一年

(一三二一・二年)に没したとするが、信頼しえない。前述したごとく、七一六年(一三二六・七年)の末頃には、エセン・ブカがいまだハン位にあった。また、元朝史料には「延祐七年(一三二〇年)弟怯別王立つ」とあって、至治元年(一三三一年)から泰定三年(一三三六年)まで連年のごとく元朝に來貢しているし、さらにケベクの名が刻印された貨幣の現存するものが、七二二年(一三三二・三年)から七二五年(一三三四・五)に至っている。⁽³⁹⁾これらの點を総合すると、ケベクの治世は早くて一三二七年、遅くとも一三三〇年には始まり、一三二六年に終ったと考えられる。オリヴァーやバルトリドは一三一八年頃の即位とし、この年次が現在まで採用されてきたが、その根據はなお曖昧なままである。⁽⁴⁰⁾ハンとしてのケベクは、七二〇年のヘラートのマリク・ギヤース・ウッディーンによるヤサウル討伐軍派遣要請に關する記事中に初めて現われる。

即ち、この年のジュマード第一月(一三三〇年六・七月)に、マリク・ギヤース・ウッディーンは「公正なる皇子ケベク(Padshāhāda-yi 'Ādil Kabak)」のもとへ次のとき書簡を送った。

「諸王ヤサウルはマーヴァランナフル地方からこの國へ軍隊を率い、ホラサンにおいては大なる破壊を行ない、マーザンダラーンにおいてはサイイドやイマームから婦女子や貧乏人に至る約一萬の人々を殺した。……そして、四〇日間、流血を恐れぬ不敵な四萬の兵をもつてヘラートの町を包圍したが、神の恩寵と王國の恩恵とによって、穀類を焼き拂い、若干の乞食やごろつきを殺した他は何ら爲しえなかった。「逆に」彼の配下の千人もの名のある勇士たちが、ヘラートの市内にて殺された。現在、ホラサンでは、彼がマーヴァランナフルを狙っているとの情報が廣まっている。もし公正なる皇子 Padshāhāda-yi 'Ādil が彼の驅逐と根絶のために一軍をこちらの國へ派遣しなければ、再びまたそちらの諸地方に動亂が勃發し、以前にも増して混亂と騷亂が起こるであらう。」

これに應えてケベクは言う。

「余が、近年、「アム河の」向こう側へ兵を送る意圖など全くなかったことは周知の通りである。しかし、諸王ヤサ

ウルが大なる破壊を行なっており、至高なる神の下僕たちが彼の軍隊の壓迫と不正のために悲嘆と災禍のただ中にあることをマリクが明らかにした以上、余にとって、軍隊を派遣して彼の驅逐のために可能な限り努めることは正當なこととなった」と。

かくして、ケベクは一軍を派遣し、前節で述べたごとく、ヤサウルを倒すに至ったのである (TH, 765—68)。

ここからは、ケベクが『近年』(dar-in-nazdik) 恐らく即位以後、イラン侵略の意圖を有せず、ヘラートのマリクの強い要請によって始めて軍隊を派遣したことが判る。『元史』における連年の朝貢の記事とも考え合わせるなら、それはケベクがイル・ハン國及び元朝の雙方と對立の解消に努めていたことを示す。マリク・ギヤース・ウッディーンがわざわざ派兵を要請し、ホラサン軍のアミール・フサインがケベクの呼びかけに即應したのも、ケベクのこの努力に對するイル・ハン國及びクルト政權側からの好意的評價の現われであつたに違いない。結局、ヤサウルは、統一と安定に利害の一致を見出したこれら國家諸權力によって擧げて排除されたのであり、ケベクはそれによってハン權力の強化を果たしたと考えられる。

所で、前掲の記事において、ケベクは從來の單なる『諸王、Shahzada とは異なり、公正なる皇子、Badshahzada-yi 'Adil』という新たな呼稱を附與されている。サイフィーが Badshahzada と呼ぶのは他にドウウのみであつて、單なる Shahzada とは明確に區別されている (ex. TH, 401) ことから考え、これはまさにケベクがその時すでにハン位にあつたことを示す一つの證據でもある。しかし、ここではそれにさらに 'Adil が附されている點に注目したい。サイフィーとほぼ同時代のワッサーフが、チャガタイ軍のホラサン遠征に關する記事中で、ケベクをすでに Shahzada Kabak 'Adil と呼んでいる (TW, 613) ことは、當時、ケベクの名に『公正なる ('Adil) の號を附することが一般化していたことを推測させる。そして、この呼稱が單なる外交辭令でなかつたことは、例えば、一三三三年にマウヴァランナフルを訪れたイブン・バトゥータの「ケベクは異教徒であつたが、しかし、統治において公正 ('adil) であり、抑壓された者たちには公平

で、ムスリムには寛容と敬意を示した」という記述 (IB, 31)、あるいは、「順番がケベク・ハンに達した時、王國は彼の偉大さにより立派になり、彼の公正さと良貨 ('adi va 'adali) の名聲は世界中に知れわたった」(ZN/S, 14)、「ムッワ・ハンの子ケベク・ハンは賞讃すべき性質の君主であり、王國は彼の準備の完全さ、統治の卓越さ、知恵と權威とによってあらゆる光輝を得た。そして彼の公正さ ('adi) の名聲は世界中に知れわたった」(ZN/Y, 80a)、「第十代目の王であるケベク・ハンは、その系統の内で性質の賞讃さるべき君主であり、公正なる統治者 (jahan-dari-yi ma'dalat-shi'ar) であった」(RS, V, 227)、「年代記作者たちの一致した意見により、ケベク・ハンは正義 ('adi) と寛容の印の現われる所、慈悲と恩恵の光の發する所であった」(HS, III, 90)とするティームール朝諸史家の記述によって明らかである。諸書はさらにケベクの「公正なる統治」の具體的な諸相をいくつかの逸話を介して傳える。ここではそれらの詳細については省略せざるをえないが、イブン・バトゥータの、『神學者バドル・ウッディーン・アル・マイダーニー Badr al-Din al-Maydani とのケベクという名に關する對話』及び、『貧しい婦人に對するアミールの横暴を裁く話』(IB, 32—33)、あるいは、『ナタンズイーの「エセン・ブカとケベクの定住民への對處の仕方」の相違に關する話』(MT, 107—8) として、ナタンズイーやヤズディー等の傳える、路傍の人骨についての調査と裁きの物語、(MT, 110—11; ZN/Y, 80a—b; RS, V, 227—8; HS, III, 90) がそれである。これらの逸話が、イランの傳統的な「教訓文學」の型に従ったものであることは一目瞭然であり、必ずしも事實を語ったものではないであらう。ただ、歴代のチャガタイ・ハンで、このように多くの逸話を歸せられた例は他にない。當時のムスリム社會におけるケベクの公正な君主としての名聲の程がしのばれよう。そして、そこからは、自身ムスリムではなかったにもかかわらず、イスラーム文化の理解に努め、國家の綱紀を正して定住社會の福祉と安寧に意を注ぐ君主の姿が浮かび上がってくる。このようなケベクの君主像は、一方において遊牧貴族たちの恣意的な行動を抑制し、他方において在地支配層の協力を得て、ハン權力を強化し中央集權國家を確立せんとする、タリク打倒のクーデター以來十餘年にわたって一貫して追求されてきた彼の政治的意圖の反映に他なるまい。そして、彼

が最大の敵であったヤサウルを討滅して、附和雷同しがちな遊牧貴族たちを強力に統御することが可能になった時、その意圖は最終的に達成されたと言える。その意味でまさにヤサウルの死は、ケベクによるチャガタイ・ハン支配體制の確立を象徴的に示すものであった。

おわりに

十四世紀第一四半期に中央アジアにおいて展開された權力抗争は、モンゴル支配層内部における政治權力の一元化・整理化の過程であった。そして、その過程はケベクによるドゥワ家政權の安定的確立をもつて終結し、彼の治下チャガタイ・ハン國はしばらく統一と安定を享受しえた。ここに至るまでにケベクが辿った方向は、まさにイル・ハン、ガザンの「部族と財政」の問題を解決せんとした統治努力と軌を一にするものと考えられ、それはモンゴル支配者たちが自らの支配體制を維持していくために必然的に辿らなければならなかった道程であったと言えよう。ケベクが「小ガザン」と稱される所以である。⁽⁴⁾しかし、この道程は單にモンゴル支配層間の政治的權力闘争のみによって辿られた譯ではあるまい。同時に、在地農耕定居社會における政治的・社會經濟的秩序の再編を必須の要件としたことは疑いない。本稿においては、主として諸史書によってこの過程の政治的側面の一端を明らかにしたに過ぎない。より詳細について、特にその社會經濟的内實については、なお文書史料や貨幣資料等をも併わせ検討する必要がある。後日を期したい。

註

- (1) 拙稿「チャガタイ＝ハン國の成立」、『足利惇氏博士喜壽記念
オリエンツ學・インド學論集』、日本オリエンツ學會編、一九
七八年、一四三—一六〇ページ参照。
- (2) W. Barthold, *Čaġatāi-khān, the Encyclopaedia of Islam*,
1st ed., Leiden, 1913, vol. 1, p. 814; B. Бартольд, История
культурной жизни Туркестана, Сочинения, т. II—I,
Москва, 1963, стр. 263.
- (3) C. M. D'Ohsson, *Histoire des Mongols*, Amsterdam, 1852,

1. T. IV, pp. 565—68, 605—8, 613—30, 642—44.
- (4) A. Vambéry, *Geschichte Bochara's*, Pesth, 1872, repr. 1969, p. 171; E. E. Oliver, *The Chaghatai Mughals*, J. R. A. S., vol. XX, part 1, Jan. 1888, p. 106.
- (5) R. Grousset, *L'Empire des Seldjucs*, Payot, Paris, 1939, repr. 1965, pp. 413—4, 462.
- (6) J. В. Строева, Борьба кочевой и оседлой знати в Чагатайском государстве в первой половине XIV в., *Памяти академике Нанатия Юлиановича Крачковского, Сборник статей*, Ленинград, 1958, стр. 206—20.
- (7) В. В. Бартольд, История Туркестана, *Сочинения*, т. II—1, Москва, 1963, стр. 152—4; его же, История культурной жизни Туркестана, стр. 262—5.
- (8) А. Якубовский, Тимур, опыт краткой характеристики, *ВИ*, 1946, №. 8—9, стр. 48—52.
- (9) И. П. Петрушевский, Из истории Бухары XIII в., *Ученые записки ЛГУ*, Серия востоковедческих наук, вып. 1, Ленинград, 1949, стр. 111—13; его же, *Земледелие и аграрные отношения в Иране XIII—XIV веков*, Москва-Ленинград, 1960, стр. 48—52.
- (10) トナチーン²⁴ 'Jaghatai' トナチ²⁵ Mīshkāy-far トナチ²⁶ Būt²⁷ Qadaqāy トナチ²⁸ Būqā-Tīmūr-far トナチ²⁹ Ūrk-Tīmūr³⁰ トナチ³¹ Yasawt-ughul³² ト記ナ。
- (11) トカ・テムル³³、ドゥワの父、Baraq (在位一二六六—七一年)の死後、ニクバイ Negübei (在位一二七一年)の短い治世の後を繼いで即位したが、その在位年代についてはなお不明な點が多い。なお、以上の在位年代は J. A. Boyle (*The Successors of Genghis Khan*, tr. from the Persian of Rashid al-Din, New York & London, 1971, p. 345)によった。
- (12) カンシャニーは、七十六年(一二二六・七年)の條におおづ、ヤサウルの年令を二十八歳と記す。
- (13) 詳しくは、拙稿「チャガタイ=ハン國の成立」一四六一—五四ページを参照。
- (14) カンシャニーは、ドゥワの計報が七〇六年ジヌマータ第二月十八日(一二三〇六年十二月二十五日)にイル・ハン宮廷に届いたとしているが、ワッサーフは、ドゥワの死とクンチュクの即位を七〇六年末のこととする。
- (15) ワッサーフにはオルグの言は「我々はドゥワを長(aqa)と認めていた。〔故に〕ドゥワが没した今、彼の息子たちが優先權(rubati-ruihan)を有する」とある。
- (16) カンシャニー(TU, 39—40)によれば、ドゥワのオルドは、そして恐らくクンチュクのそれも、アルマリク地方のクナース草原 Marghāt-i Qunās にあつたことは間違いない。そして、ケントは、この後のタリク打倒のクーデター直後にチャバルに相對するにクナースから發つてゐること(TU, 148)‘また、兄ヤン・ブカをクナースに迎へてゐること(TU, 150)などから、クンチュクが没した時、クナースの地に居たものと推測される。
- (17) 元朝側の史料には、この遣使についての記事は見出されない。

- (18) D'Ohsson, *op. cit.*, T. II, pp. 520—21; Vambery, *op. cit.*, pp. 169—71; Oliver, *op. cit.*, p. 105; Grousset, *op. cit.*, pp. 411—12.
- (19) ヤズディーは次のごとく記している。「その町がカルシー Qarshi として知られる理由は、ケベク・ハーンがナサフ Naasaf あるいはナフシヤブから2ファルサフの地點に宮殿 (qasr) を建築し、モンゴル人が宮殿のことをカルシーと呼んだことからであった。」
- (20) ヤズディー (ZN/Y, 113a, 2486, 298a, I—83, 462, II—25) の記す「ケベク・ハーンのトゥメン」(Tumän-i Kabak-Khan) がそれに當るかどうかは不明。
- (21) 佐口透「十四世紀に於ける元朝大カーンと西方三王家との連帶性について——チャガタイ・ウルス史研究に寄せて」、『北亞細亞學報』第一輯、一九四二年、一—六四ページ、及び拙稿「チャガタイ・ハン國の成立」、一四八—一五〇ページ参照。
- (22) 「拜住元師出使事實」(『清宮居士文集』三十四所收) の皇慶二年(一二三三年)の條にも「アビシユカ(阿必失哈)の發言についての記事が見出される。」
- (23) 「拜住元師出使事實」、皇慶二年の條には、拜住がウルジャイトゥへの遣使の途次、エセン・ブカに拘留され詰問を受けた經過が述べられている。
- (24) 『元史』一二八、牀兀兒(土土哈)傳、及び「句容郡王世續碑」(『國朝文類』二十六)、並びに前出「拜住元師出使事實」は、延祐元年(一二三四年)に諸王也先不花が叛いたとする。
- (25) カーシャーニー(TU, 153)は、チャガタイ軍のアム河渡河を七三年ラマダン月の末(一二三四年一月頃)とするが、別の箇所(TU, 164)では、七三年ズルカダ月(一二三四年二月頃)にチャガタイ軍歸還の報がウルジャイトゥのもとに届き、彼らが渡河してすでに五箇月経過していたことを記す。これから逆算すると、チャガタイ軍のアム河渡河は一二三三年の十月頃でなければならない。ワッサーフ(TW, 610)が、チャガタイ軍に對してウルジャイトゥが出動し、トゥース Tus に到着したのが、七三年の冬の始め(一二三三年の初冬)とするのがそれを裏附けるものとなる。
- (26) 『元史』牀兀兒傳及び「句容郡王世續碑」には、延祐二年(一二三五年)、牀兀兒等がエセン・ブカの派遣した也先不花及び忽都帖木兒(Qutugh-timur か?)を赤麥干(Chimkant)の地に破り、追跡して鐵門關に至ったとあるが、元朝軍がキシュとテルメズの間に位置する鐵門關 Darband Āhanin まで侵入したとは考え難い。誇張があるいは別の地を指しているかのいずれかであろう。また、カーシャーニー(TU, 210—11)は、元朝軍がチャガタイ一家族(ulus va utugh-i Jaghatay)のホルトである、Talas の夏營地と Ismukuk の冬營地とを占據し、諸オルドや妃や息子たちを掠奪したと記す。Talas はタラス Taras に對するモンゴル人の呼稱である(TU, 214)が、Ismukuk の位置は不明である。恐らく、元朝軍は、タラス方面からチムケントのあるイスビーシャーブ Ishbiyab 地方に至ったのであろう。
- (27) カーシャーニーは、ヤサウルの南下及びケベクとの戦闘を、七一年ラジャブ月(一二三六年九・十月)からシャッパーン

月(同年十・十一月)にかけて述べる。サイフィーは、同年ジ
 ャマード第二月(二二一六年七・八月)からラジャブ月(同年
 九・十月)にかけてヤサウルの亡命事件を記す。

- ② サマルカンドの北西 Ishkhan 地方の村。W. Barthold,
Turkestan down to the Mongol Invasion, London, 3rd. ed.
 1968, pp. 95—6 参照。

- ③ テルメズの北の Gufan 地方か? W. Barthold, *op. cit.*,
 p. 74 参照。

- ④ カシヤーニー (TU, 222) は七一六年ラマダン月二十七日
 (二二一六年十二月十三日)、『ワッサフ』(TW, 617) は同二
 十九日(同十五日)、『ハーフィズ・イ・アブル』(DJT, 119)
 は同年シャッワール月一日(同年十二月十七日)とする。

- ⑤ ワッサフ (TW, 618) にすれば七十七年の春(二二一七
 年春)、『ハーフィズ・イ・アブル』(DJT, 123) によれば同年
 サファル月の始め(二二一七年四・五月頃)のことであるとす
 る。

- ⑥ アミール・ヤサウルの求婚の相手については、『ワッサフ』
 (TW, 620) はヤサウルの大伯父の子、ズルカルナインの娘エ
 セン・クトルグ Isan-qutluq とし、『サイフィー』(TH, 649)
 は單にヤサウルの娘の一人とする。

- ⑦ アミール・ヤサウルの死は、『サイフィー』(TH, 649) によ
 ると、七一七年ムハッラム月(二二一七年三・四月)のことであ
 るという。

- ⑧ サイフィーによれば、ヤサウルは部下のアミールたちに「イ
 ランの諸國を余のものになれしめよ。汝等總べて領

地を得、財物と地位の所有者とならん」と言い (TH, 656)。
 また、「余は、帝王アブー・サイードが「いまなお」王國の玉
 座に座したまわず、アミール等が勝手氣ままに統治に介入して
 いると聞いている。この知らせが事實ならば、余はホラサンか
 らイラクへ向かい、スルタン・アブー・サイードを玉座に就
 かしめ、その王權の反抗者たちを根絶やしにして歸還せん。も
 しそれが偽りであり、スルタン・アブー・サイードが繼ぐべき
 玉座に就きたもうておられたなら、余はマーザンダーランの地
 よりひき返さん」とも言ったという (TH, 680—81)。

- ⑨ 例えば、七一九年ラビー第一月(二二一九年四・五月)頃、
 ヤサウル自らのラートを包圍攻撃した際、彼の軍の兵士たちは
 彼が見守っている時には奮戦して見せ、見ていない時には戦う
 のを止めたという (TH, 713)。

- ⑩ この觀點は、『イランの場合』(1913)の著者、
 フスキーによって提示されている。И. П. Перушевский,
Земледельцы и ..., стр. 51 参照。

- ⑪ 「拜住元師出使事實」延祐七年の條参照。

- ⑫ 『元史』二十七、英宗本紀一以降、同三十、泰定帝本紀一に
 參照。

- ⑬ E. E. Oliver, *The Coins of the Chaghatai Mughals*, J.
 A. S. B., part 1, No. 1, 1991, p. 11; M. E. Массон,
 Историческая этюд по нумизматике Джатагаидов,
Труды САГУ, Новая серия, вып. CXI, 1957, стр. 47

—49—

- ⑭ Oliver, *The Chaghatai Mughals*, p. 106; ditto, *The Coins*

of ..., p. 9; Бартольд, Очерк истории Семиречья, *Сочинения*, т. II—I, Москва, 1963, стр. 75; его же, История Туркестана, стр. 152; его же, История

культурной жизни ..., стр. 263.
⁽⁴¹⁾ 植村清二「察合臺汗國の興亡」三『蒙古』第八卷、第十二號、一九四一年、七十一—七十三頁参照。

was more effective than single-crop cultivation in transforming the salty soil there. Moreover, the narrow, ten to fifteen *mou* 畝 areas under cultivation were suitable for double-crop cultivation. It became more advantageous than single-crop cultivation.

However, in terms of harvest yield, double-crop cultivation of wet rice in these new coastal fields was inferior to the late-ripening, single-crop rice cultivation in the fields of the interior. It had been chosen in an attempt to avoid the problems of irrigation and poor soil. Consequently, double-crop cultivation of wet rice in the new coastal fields did not attain the height of its productive potential, nor did it attain the standard of Song period techniques of wet rice cultivation.

KEBEK AND YASAWR

The Establishment of Rulership in the Chaghatai-khan

KATO Kazuhide

During the first quarter of the fourteenth century, the state of Chaghatai khan commenced on a course to centralize the authority of its inner ruling circles in rebuilding a rulership. This political process is accurately reflected during this period in the struggle between Kebek of the Duwā's family clan, and Yasawr, of another kings' lineage.

In summary, Kebek murdered a member of an affiliated clan, Taliqu, as a "usurper" and, by checking the powerful nomadic aristocracy, persevered in strengthening the governmental authority, tried to act in his own interest in opposition to him. Consequently, Yasawr was forced into exile to Khurāsān and failed in his attempt to seize control of Iran. In 1320, he was defeated by armies despatched by Kebek, who had already become Chaghatai-khan.

While possessing the typical qualities and appearance of a nomadic aristocrat, Yasawr was yet a new kind of nomadic aristocrat who, as a moslem, exhibited a leaning toward Islamic culture. He lost charge of the government because he had no policy for governing a non-nomadic people.

Kebek, on the other hand, appearing to be a follower of an alien religion, attempted to understand Islamic culture and made plans to strengthen

its relationship with the non-nomadic society. He won the fame of being a just ruler.

In conclusion, the process of centralization of rule developed as the Khan authorities were able to control the selfish and separatist ambitions of the nomadic aristocracy. Thus, this development, ultimately based on the death of Yasawr, may be said to have ended when the aim of Kebek to establish a stable government of the Duwā's family was attained. Under the rule of Kebek, the state of Chaghatai-khan entered a peaceful period.

BANIA MERCHANTS UNDER THE MUGHAL EMPIRE —A Case Study on Those of Surat City—

NAGASHIMA Hiromu

In this paper the author examines the role and position of Hindu and Jain merchants under the Mughal Empire, taking as an example bania merchants (which included both Hindus and Jains) of Surat City, the biggest port of the Empire, in the 17th century. Though considerable studies have been done on merchants of Surat, the commercial careers and political roles of the merchants are to be examined further.

In the 1st Chapter I therefore, follow the careers of Hari Vaisya and Virjī Vōra —the two biggest bania merchant-bankers of the city—, the former since the year 1617 and the latter since 1616. Especially Virjī Vōra improved and maintained his position as one of the leading bania merchants of the Empire during more than fifty years up to around 1670. This career of his is remarkable one, when we consider that this period witnessed three successive reigns of the emperors, more than thirty changes of the city-governors, and the attacks on the city at least twice.

In the 2nd Chapter the author examines the commercial careers of the members of the Thākur family and the so-called Pārakh family (—though I do not consider that whoever had the surname Pārakh belonged to one and same family or lineage—), who played important roles as brokers or money changers (*ṣarrāfs*) of the English East India Company, and I emphasize the importance of brokers and money changers (both of which occupations were mostly monopolized by banias) in the commercial world